わたしの聖戦（ジハード）

女性が働くということ ―― 162

医学ジャーナリスト・医学博士　植田美津恵

スピリチュアルな世界

WHO（世界保健機関）は健康の定義として、「健康とは、病気ではないとか、弱っていないということではなく、肉体的にも、精神的にも、そして社会的にも、すべてが満たされた状態にあることをいう」と定めている。1948年に提唱されたものだ。

「身体、精神、社会的」は、原文では「physical（フィジカル）、mental（メンタル）、social（ソーシャル）」である。医療系の学生なら必ずどこかで暗記させられる一文であるが、1999年に一度改正案が出されている。それによれば、この3つに「spirit ual（スピリチュアル）」を加えようと複数の国が提案したという。多くの国がこれに賛成したものの、困ったのは日本である。はて、スピリチュアル？　いったい何と訳せばいいのだろう。「宗教的」「霊的」「魂」……　辞書で調べればこんな日本語が目につくが、これではしっくり馴染めない。すでにカタカナ英語として使われているのでそのままでもいいのかもしれないが、やはり唐突感は残る。結局、この案は見送りとなって改正には至らなかったのだが、いまだにスピリチュアルを加えようとの声はよく耳にする。

日本語で理解しようとするから行き詰ってしまうのだが、原文（英語）で聴けば、さほど違和感はない。また、提案国のほとんどが中東の国々だったと知れば、なおさら納得できるというもの。それもまた良し、という気がしてくる。

亡くなる前に、あの世から誰かが迎えに来る、

という話を聞いたことがあるだろうか。これは「お迎え体験」と呼ばれる現象で、2012年の学術論文によれば、何と4割の人が「体験した」と答えている。つまり、半数近くが、死ぬ間際の人が「誰々（親しかった故人）が来てくれた」と口にしたのを聞いた、というわけだ。予想外に多いのに少し驚いた。これを、医学で説明すれば、モルヒネ等を使うために幻覚を見ているのだろうとか、薬を使わないまでも意識レベルの低下による妄想だということになる。そうかもしれないが、誰かが迎えに来てくれたことで死への恐怖が無くなり、穏やかに死ぬことができたという話を聞くと、この体験は、死が近い人にしてみればひとつの「儀式」であり、あの世からの「ギフト」でもあるのだろう。科学的な解明より素直に体験として信じたほうが自然である。

残された人々に聞くと、故人の夢は思ったより見ないという声が多い。あるいは、夢に登場してくれても何も言葉を発しない、と聞く。夢の中では、たいていがニコニコ笑っているだけで、会話はないことが多いようだ。

死者は言葉を失ってしまうのだろうか？

岩手に「風の電話ボックス」がある。東日本大震災で遺族を亡くした人々が、もう一度声を聞きたいと願ったことで知られる。すでにこの世にいない家族に電話で語りかける様子は、テレビでも放送され大きな反響を呼んだ。もちろん、返事があるはずもない。それでも黒い受話器を握りしめて故人に話しかける姿は、切なすぎて涙が止まらなかった。

くちなしの花の名の由来は、果実が熟しても自然に割れないところからきているらしい。

死人にくちなし、ともいうが、強いジャスミンの香を放つこの花は「幸せを運ぶ」の花言葉で知られる。大切なのは「忘れない」こと。ただ想い続けるだけでいいのだ。

うまく訳せなくても、スピリチュアルの世界は健康を考える上では不可欠だと思う。WHOもそろそろ本気で検討すべきときが来たのではないだろうか。

イラスト・伊藤栄章